

Ghostly Field Club : Untitled

Ver. Preview (Rev.1)



Episode ZERO

Prologue

——いつも通りの日常——

『いつも通り』の定義は人それぞれだけれど、大抵の人間は文字通り変わらない日常を過ごす。多少の違いはあるけれど、それでも人々は普段と変わらない日々を過ごす。

なんて言いながら、私もその一人なのだ。

平日は七時頃起きて朝食を食べ、身支度をして大学へ行く。選んだ講義を聴講してお昼には昼食、また講義に出席する。空いた時間は研究室か学内のカフェテラスで友人と他愛もない会話をする。

家に帰れば講義のレポートを進め、夕食を食べてお風呂に入り、気付けばベッドに入っている。そして目が覚めれば、また変わらぬ一日が始まる。

休日といえ、終わらない課題を仕上げるか、友人と出かけるくらいだ。何もせずに終わる日もある。

これを、おおよそ五対二の割合で繰り返している。

今も、頬杖を突き『どうすればこんな退屈な講義ができるのかしら……』と教壇に立つ教師に心の中で文句を言いつつ、こんなことを考えている。

午後一番の講義、大半の学生はお辞儀寸前、最前列に座りながら既に戦線を離脱している学生もいる。

それに比べれば、私は優等生である。講義の内容はノートにまとめているし、教科書だつて目を通してている。

そんな昼下りの講義室、典型的で模範的、どこにでもいるような大学生の日常を、私は過繰り返してごしている。

一つ違ふとすれば……

「……？」

何気なしに携帯端末へ目を向けると、一件の通知が現れた。送信元には見慣れた名前、そして題目には『本日の活動』と書かれていた。

何百、何千回も見たような光景、感覚。『そろそろかな』と、そんな予感がしたのだ。

尚も教壇の上で退屈な講義を続ける教師に気を配りつつメッセージを開くと、そこには集合場所と時間が書かれていた。

何度目だろう。彼女に出会ってから、彼女の気まぐれで行われるこの『活動』。日常の一部に組み込まれ、幾度となく繰り返すうちにこの既視感 déjà vuにも近い感覚が生まれたのだろ

う。

普通の大学生との違い、それがこの『活動』である。内容こそどこにでもあるオカルトサークルである。しかし、他のそれとの決定的違いがある。

——封じられた秘密を暴く——

それが私たち『秘封倶楽部』の活動方針であり、事実でもあった。

結界の境目を探し、時にはそれを越える。

その性質ゆえに危険な目にも遭う。夢の中で妖怪に追われることもあれば、放棄された衛星に忍び込んだ際には怪物に襲われ、怪我を負った挙句サナトリウム送り。

もちろん、毎回そんな目に遭うわけもなく、大抵は噂程度の情報を追いかけて活動している。それでも、危険というほどではないが、『非日常』な体験をすることは少なくない。

——これが、マエリベリー・ハーンの『いつも通りの日常』である——

時計を見ると、時刻は既に16時を過ぎていた。

「そろそろ行こうかな……」

作業を中断し、机を片付ける。

「あれ、ハーンさんもう帰るの？」

「ええ、今日は用事があってね」

「例の『活動』とやらですか？」

少々呆れ顔で問いかける友人を適当にあしらいつつ、荷物をまとめて席を立つ。

「まあ別にいいけどさ、あんまり無茶するなよ。結界暴きは禁止されてんだから……」

「人のことより自分の心配した方がいいんじゃない？ 今度の学会の論文、まだ書き終わってないでしょ？ ちなみに私はもう教授に見てもらったからね」

「いつの間に……？ 裏切り者！ 卑怯者っ……！」

そんな文句を背中に受けながら、私は研究室を後にした。

季節は秋、夕刻になれば肌寒く、大学構内の木々も色づき始めている。

きっと今夜も長いのだろう。そう思い、購買で軽食と温かい飲み物を買ひ、集合場所へ向かった。

「おつかれ、メリー。早いじゃない」

「12分28秒の遅刻ね。貴女が遅いのよ」

いつも通り、待ち合わせに遅れてきた少女に呆れつつ、買ってきたお茶を彼女に投げる。

「……つと!? そうそう、メリーはもつとこういう思いやりと寛大な心を持った方がいいよ?」

「いくら寛大な心を持っても、連絡もしないで二時間以上遅れてくるような人間を許せる女神様にはなりたくないわね」

「なっ……! あのとときは時計の電池が切れてたのよ! 私のせいじゃないわ!」

そんな、いつもと変わらない会話。毎回の言い訳に呆れながらも、どこかで楽しんでいるのかもしれない。

「それで、今夜はどこへ?」

早速、渡したお茶を飲む相方に問いかける。

「ここから少し行った山の中に神社があるんだって。どうもその神社、『向こう側』に繋がってるらしいの」

「なるほど。でも、なんでメールなんかで呼び出したのよ。いつもならお昼食べながら言うようなものじゃない……?」

「メリーの全快のお祝いよ！」

いわく、私の全快を祝うために、とっておきのネタを探していたが、情報収集に梃子摺っていて、ついさっき詳細な情報が手に入ったのだとか。それで慌てて連絡したらしい。一体どこから仕入れた情報なのだろう。おそらく『裏表ルート』とやらだと思うが、それ自体が怪しいものだ。

全快のお祝い。

数週間前、私は大学の構内で怪我をした。怪我なんて軽く言っているが、状況はなかなかものだった。

結論から言うと、階段から転び落ちたのだ。それも頭から。

夕刻の構内、そこで私は人影を見た。その人影が妙に気になり、私は後を追ったのだ。

「しかしまあ、誰かに押されたつてもねえ……」

「まあ、私もうろ覚えでよく覚えてないのよ。押された気がするっただけで」

人影に誘われるように構内を歩きまわった。そして、階段を降りようとしたとき、足を踏み外したのだ。踏み外した、と言うより後ろから突き落とされた、と言った方が正しい。

そして、そのまま一つ下の階まで転がり落ちた。頭を強く打ったらしく、状況を把握で

きないまま、私は意識を失った。

そして、目が覚めたら病院のベッドの上。通りかかった学生が通報したらしい。

突き落とされた、ということもあり監視カメラなどの調査があったものの、そこには一人でふらふらと歩きまわる私の姿だけが映っているだけで、それ以外に異常は見つからず、結局ただの事故として処理された。

「結局、私が見た人影はなんだったのかしら……」

「まあ、歴史ある大学だからね。七不思議と言わず百ぐらい不思議があってもおかしくないわ」

命に関わるほどではなかったけれど、頭を打ったことによる軽い脳症と足の骨にひびが入ったことにより、入院一週間、松葉杖生活二週間に加え、入院中の講義の補講と課題という豪華特典が付いた。全く以て迷惑な百不思議である。

とにかく、そんな経緯があり、彼女は病み上がりの私をお祝いと称して連れ回したいのだろう。

「まあいいわ！ 本日の活動を始めるわよ！」

予想は的中、端から祝う気は感じられない。いや、祝う気持ちはあるけれど、大方、お

祝いにこじつけて『活動』がしたいだけなのだろう。

そんな私も吝かではなかった。『活動』をしたくないと言ったら嘘になる。事実、いつものように、彼女からの誘いの言葉を待っている私がいた。

「それで、その神社ってそんなに珍しいものなのかしら？ 『向こう側』に繋がっている、なんて言われてる神社はいくらでもあるわよ？」

「それがね、その神社、『存在しない』らしいの！」

「存在しない？ それじゃ、どうやって……」

片目を開けた仕草、それで大体の察しがついた。

「そういうこと！ メリーの『眼』がないと探せないわけ」

私の眼。結界の境目が見える眼。いつからかは覚えていない。物心ついた頃には、そんな力を持っていた。

要はその眼を使って私に神社への入り口を探せというのだ。こういった面倒事はいつも私の担当だ。

「分かったわ。でも、私の眼も万能じゃないのよ？ 近くまでは案内してもらわないと」

「心配ご無用！ 大体の場所は絞り込めてるわ！」

そう言って彼女は歩き始めた。

しばらく歩き、舗装された道を逸れ、山道へ。なおも進み、獣道を抜けると、そこには道すらない深い森が広がっていた。

（こんな深い森、あったかしら……？）

どう考えても、こんな暗がりに来るようなところではない。昼間に来ても迷いそうなものだ。それでも、前を歩く彼女は、迷うことなく進み続ける。

「ねえ、どうしてこんな時間の来たのよ？ もっと明るいうちに……？」

ああ、なるほど。やっぱり気持ちが悪い。

時折、夜空を見上げる彼女。

宇佐見蓮子。

彼女の眼。

星を見れば時間が分かり、月を見れば今いる場所が分かる。

彼女は、月を頼りに目的地へ進んでいるのだ。彼女は私の眼の事を気持ちが悪いなんて言うけれど、どう考えたって彼女の眼の方が、気持ち悪い。

まるでジャングルにでも迷い込んだかのような深い森を進む。

「そろそろ着くわ！」

蓮子の声が真つ暗な森に響く。

その時だった。

背後で物音がした。と、言うより誰かがいる。

そう思ったのは蓮子も同じだった。さっきまでの生き生きとした彼女は消え、不安と恐怖が入り混じった表情を浮かべていた。

きっと、私も同じ表情をしていたのだろう。

そんな私の表情が余計に彼女を心配させたのか、ただいいところを見せたかったのか、あるいは純粹に好奇心が恐怖に勝ったのか。蓮子は物音のした方へ、ゆつくりと近づいていった。

——好奇心は猫を殺す——

ことわざというものは、どこまでも的を射ているものである。

彼女が、茂みを掻き分け、覗き込んだ瞬間。

『カチッ』

金属の擦れ合うような、ぶつかり合うような音。

「……蓮子？」

返事はなかった。

瞬きをした、その一瞬だった。力なく、崩れ落ちるように倒れる彼女の姿が、私の目に映った。

すかさず駆け寄り、彼女を抱え込み、名前を呼ぶ。

何度呼んでも、体を揺すっても返事はない。

代わりに返ってきたのは、両手を包む、温かくぬるりとした感触。

「……えっ？」

紅。

暗い森、木々の隙間から射し込む月明かり。その感覚の正体が分かるのには十分だった。

「ちよつと蓮子、どうしたのよ！」

そう叫び、彼女の顔を覗き込む。

——そこが、流れる紅の源だった——

気付けば、走り続ける私がいた。

素人でも分かる。

蓮子は、宇佐見蓮子は死んだ。殺されたのだ。

額には大きな風穴、溢れ出る血液。私が気持ち悪いと言っていたあの眼は、月よりも、星よりも先を見つめ、それでいて、何も視ていなかった。

自分が今、どこにいて、どこへ向かっているかも分からない。

（こんなときに蓮子の眼があれば……）

散々気持ちが悪いと言ってきたあの眼も、今となれば、羨ましく思えた。でも、その眼を持つ彼女はもういない。

今はただ、当てもなく、彼女を殺した『誰か』から逃げるだけだった。

『誰か』というのも、正体は妖怪や怪物ではなく、おそらく人間だ。深く被ったフードで顔は見えなかったが、二本の足で立ち、袖口から見えた手と小柄なシルエットは、人間のそれそのものだった。

根拠はない。ただ、それが『人間だ』と感じたのだった。

しばらくすると、追ってくる気配は消えていた。

（逃げ切った……？）

辺りを見回しても、それらしき人影は見当たらない。

「とにかく、落ち着くのよ……」

そう自分に言い聞かせ深呼吸をする。取り乱してしまつては助かるものも助からない。

しかし、冷静になろうとする度に、彼女、蓮子のことが脳裏を過る。

動揺と吐き気を抑えながら、次の行動を考える。

（安全なところへ、街へ出ないと……）

耳を澄ませば、遠くで街の喧騒が聞こえる。思い返せば、ここへ来るのにそう時間はかかっていない。駆け足ならばすぐに街へ出られるだろう。

「……でも……、何かおかしいわ……」

辛うじてまともな思考ができるようになった頃、ある違和感を覚えた。

（どうして追ってくるだけで、私のことを撃たなかったのかしら……？）

相手は銃を持っていた。追わずとも、ただ撃てばよかったのだ。それなのに、撃つどころか、危害を加える意思すら感じられなかった。

（私を、襲うつもりはなかったってこと……？）

だとすれば、どうして蓮子だけが襲われたのか。考え始めたらきりが無い。頭を振り、余計な思考を止めて街の方向へ歩みを進めた。

「……ッ！」

突然の銃声と同時に右足に激痛が走った。その原因は見ずとも分かる。

撃たれたのだ。

続いて脇腹にも痛みが走る。

（どうして……？ さっきまでは襲ってこなかったのに……！）

振り向いて、その理由が分かった。

そこには、追ってきていた『誰か』とは違う人物がいた。

暗い森。それに加え、秋には早すぎる厚手のマフラーで顔はよく見えない。しかし、これだけは断言できた。

——『彼女』も人間だ——

銃声が聞こえる度に、体に激痛が走る。

その痛みに耐えながらも走り続けたが、次第に足に力が入らなくなっていった。五発目だろうか。そのころには立つこともできず、遂には倒れ込んでしまった。

(……寒い)

夜の冷え込みに加え大量の出血。

体力も、そして精神も、限界だった。

見上げると、銃口を向けた『彼女』がいた。

冷たい瞳が、私を見ていた。それなのに、どこか迷いのある、そんな眼だった。よく見ると、私に向けられた銃口が小刻みに震えているのが分かった。

夜風で木々が揺れ動く。その一瞬、月明かりが『彼女』を照らす。

「……貴女は……？」

——既視感——

ありえるはずのない感覚、それでも、どこかで見たような光景。

走馬灯なのだろうか。これまでの人生の出来事が脳裏を走る。

そのほとんどが、『秘封倶楽部』であった。

しかし、それも終わり。

銃を持つ『彼女』が引き金に指をかける。

『死』というのは、これほどまでに、呆気ないものなのか。

薄れゆく意識。

その中で、もういないはずの彼女の名を呼ぶ。

——助けて……、蓮子——

衝撃。

銃声。

その中で、私は、意識を手放した。

——あとがき——

お初にお目にかかります、夜旅人ジャックと申します。

秘封に魅せられて、恐らく四年少々。とても浅い年月ですが、「秘封で何か書きたいなあ」という思いが日々高まり、こういった形で公開することになりました。冒頭のプレビュー版ですが……。

私は工学系の人間なので、実験報告書やら論文はよく書くのですが、文学書は全く書いたことがないので、恐らく色々突っ込みたいところあるかと……。

このプレビュー版ですが、ホームページにもある通り、今年の「境界から視た外界——至——」で、知り合い含む何名かの方にお渡ししたものを、修正・加筆したものになります。脱字、直したつもりですが……。加筆した分、また発生しているかもしれません。お許しを……。

さて、余計な話はこれくらいにして、内容の方に移りましょう。

メリーの日常から始まる物語、いかがだったでしょうか？

『始まる物語』、なんて言いつつ、プロローグの時点で大事な主人公をロストしていま

すが……。

実は、と言うか、当り前ではあるのですが、所々に伏線が埋め込まれています。特に最後のシーン。銃とか犯罪捜査物がお好きな方は、表現に少々違和感があるかもしれません。

それも後々明らかになると思います。お楽しみに！

そんな感じで、今後のストーリーにも色々と網を張り巡らせていく予定なので、それも含めて楽しんでいただけると幸いです。

本編の公開は今年の「科学世紀のカフェテラス」を予定しています。サークル参加なんでももちろん初めてなのでどうなることやら……。ちなみに、このあとがきを書いている時点で申し込みしていません……。

ともかくも、がんばって進めて行こうと思いますので、興味のある方がいらっしゃいましたら、応援していただけると嬉しいです。

それでは、まだどこかでお会いしましょう。

書名	未定
公開日	2017 年 5 月 1 日
発行	Sightless Telescope (http://sightless-telescope-cp.com)
著者	夜旅人ジャック
原作	上海アリス幻楽団/ZUN 様

